

ハチ公に関するエピソードについて

ハチ公の死因に関しては複数の原因が推測されています。既に当時から飼い主の帰りを待つ忠犬として広く知られていたハチ公は死後すぐに飼い主である上野氏の勤めていた東京帝国大学農学部で検査が行われました。この解剖の結果、大量のフィラリアが寄生していたことがわかり死因は長らくフィラリア症とされてきました。現在も保存されているハチ公の剥製を見ると心臓に寄生した大量のフィラリアを見ることができます。フィラリア症とは線虫の一種であるフィラリアが寄生することによる病気の総称であり、多くの脊椎動物に固有のフィラリアの種類が存在しています。特に犬の心臓や肺に寄生する犬糸状虫が有名でありハチ公に寄生していたものもこの犬糸状虫でした。フィラリアの幼生はマイクロフィラリアと呼ばれ、血液中を循環しています。これを蚊が媒介し宿主となる動物に運ばれ、侵入。体内をめぐる心臓へと向かいます。そのため寄生された犬は心臓や肺の機能が低下して息切れや咳の症状が現れ、やがては肝臓や腎臓の働きにも影響を受けます。この病気は現在では予防法が確立しており発症を防ぐことはできるのですが、慢性化すると死に至るものであることもあり、やはり恐ろしい病気として認識されているようです。

ハチ公の解剖後も心臓や肺などの臓器は農学部内で保存されてきました。しかし、その調査は長く手つかずのままでした。2010年からそのことに注目した中山教授はホルマリン液の交換の際、調査に踏み切りました。するとMRI等を用いた検査の結果、心臓及び肺に悪性の腫瘍を確認し、死因の一つとして新たな発見に至りました。

また、当時の解剖の際に胃の中に焼き鳥串のようなものが数本残っていることが確認されていました。これもまたハチ公の体には少なからずダメージを与えたようです。ハチ公の主である上野教授は松濤と自宅があったため、よく渋谷に行っていたそうです。その際、渋谷に建ち並ぶお店から食べ物を得ており、焼き鳥が好物であったという話もあります。一つの仮説として、渋谷に行けばご飯にありつけることを学習したハチ公は上野教授亡き後も渋谷へと通うことをして、それが忠犬ハチ公の物語へと転換されたのではないだろうかという話もあります。

この話を聞いたときは納得したのですが、上野教授が亡くなったあともこの犬を世話してくれていた人がいるはずで、実際いくつかの人の元を転々としたようですがちゃんと管理してくれる人のもとで飼われていたようです。それならばわざわざ渋谷駅に通う必要というものがあつたのか、やはり疑問が残ります。